

内野 吾郎 著

日本文芸研究史

桜
楓
社

日本文芸研究史

昭和五十九年一月十四日 初版印刷
昭和五十九年一月二十日 初版発行

定価 四八〇〇円

著者 © 内野 吾郎

発行者 道坂 春雄

印刷所 共信社印刷所

101 東京都千代田区猿樂町二一八一—三

(株) 桜楓社

(電話) 〇三—二九五—八七七一

(振替) 東京 六一—一八〇二〇

3091-840118-0723 Printed in Japan

著者との了解により検印省略

盗本には充分注意しておりますが落丁・乱丁などの折には
小社あるいはお買い求めの書店でおとりかえします。

日本文芸研究史 目 次

序 章 構想と課題——学史と方法論の探求……………九

一 研究史と学史と——その必要性と可能性……………九

学史と研究史の意義——未完成の理由——研究史の現状と将来

二 資料集成的研究史——従来の業績批判……………二三

『国文学研究史』——研究史と国学史——『日本文学研究史』——その他の研究史

三 学史的研究史の構想——本書の組織と課題……………二三

時代区分の問題——学史としての研究史——国文学研究史と文芸研究史と

〈付〉関係文献目録抄……………三五

第一章 前 史——批評と研究意識の萌芽……………三

時代の概観——弘仁九年（八一八）まで……………三二

対象と意識の発生——修史と誦習と竟宴——漢詩と和歌の撰集意識——最古の
歌学書

〈付〉前史略年表……………三五

一 古代における中国文化の輸入……………三七

古代涉外略史——遣唐使の意義——古代日本の漢詩文——中国渡来の文学書

——文学者としての空海

二 記紀の受容と研究意識の萌芽…………… 四〇

記紀受容史の序——万葉集の中の古事記——日本紀の講筈——研究意識の萌芽

三 批評意識の発生——万葉集の撰歌と分類…………… 五二

記紀の歌謡と伝承——万葉集の集成——撰歌と批評の意識——歌集の部立と分類——万葉集の分類意識——漢詩集からの影響

第二章 古 代——歌学と歌論の発生…………… 五五

時代の概観——弘仁十年（八一九）～永万元年（一一六五）…………… 五五

歌学と歌論——初期の歌学書——歌合史の意義——古今集の序——貫之と公任の位置

〈付〉古代略年表…………… 五七

一 初期歌学書の成立——『文鏡秘府論』と『歌経標式』…………… 五九

四つの和歌作式——孫姫式と石見女式——歌経標式の性格——文鏡秘府論との比較——詩病論と歌病論——歌体論の発展

二 批評意識の発展——歌合の判詞から…………… 六〇

詩合と歌合の発生——亭子院歌合と判詞——歌合と歌集の交渉——天徳内裏歌合——天徳歌合の判詞と批評意識

三 古代歌論の発生——古今の序から『新撰髓脳』へ…………… 一〇〇

古今集両序論——和歌の本質と起原——和歌と漢詩の分類——仮名序の歌人論
——新撰髓腦と公任の歌論——公任と清輔の間——古代歌学の發展

第三章 中 世——歌論と注釈の發展……………二五

時代の概観——仁安元年（一一六六）～貞享三年（一六八六）……………二五

中世の時代環境——幽玄論とその展開——古典と有職の伝承——研究対象と方法の拡大——隠者と連歌師の学芸……………二五

〈付〉 中世略年表……………二四

一 中世歌論の發展と幽玄論の展開……………二四

藤原俊成と幽玄論——俊成の判詞から——幽玄歌論の發展——藤原定家の人と業績——幽玄から有心へ——二条家の家流と歌論——正徹と心敬の歌論……………二四

二 文芸論の分化——物語と連歌と能の理論……………二六

風葉集の物語歌——無名草子の物語論——連歌論と連歌式——二条良基と初期の連歌論——連歌の沈滞と再興——宗祇と新撰菟玖波集——俳諧の連歌へ（宗鑑と守武と貞徳）——世阿弥の生涯と能理論の完成——世阿弥の能楽論（幽玄と花）——能楽論の衰退……………二六

三 古典の伝写と注釈——公家と隠者の学芸……………二六

古典の書写と校合——仙覚の万葉研究——初期の源氏研究と四辻善成——一条兼良の古典研究——隠者の系譜と連歌師の学術——三条西家の学統——細川幽斎とその門流——近世初期の注釈家……………二六

第四章 近世——国学研究の展開……………三二

時代の概観——貞享四年（一六八七）～明治三十四年（一九〇一）……………三二

近世の時期区分——契沖と荷田派の業績——泉門と鈴屋の学統——江戸派と平

田派の流れ——古道論との決別

〈付〉近世略年表……………三八

一 注釈から文献学へ——契沖と荷田派の業績……………三四

〔第一期・形成期の国学〕

〈儒学の時代〉と上方文化圏——契沖の学問形成と長流——万葉代匠記の成立

——〈文献学的方法〉——〈契沖学〉の評価と継承——荷田春満伝記考——春

満の学問と業績——有職学派の流れ

二 国学方法論の大成——泉門と鈴屋の学統……………三六

〔第二期・成立期の国学〕

江戸荷田派の成立——真淵伝と遠州国学——荷田派の人びと——学問と生活の

苦闘——真淵の業績と江戸の泉門——泉居の学風と鈴屋への影響——本居宣長

の前半生——宣長の古学普及——宣長文芸論の方法——鈴門とその流れ

三 対象と方法の分化——江戸派と平田派の門流……………三九

〔第三期・分化期の国学〕

真淵没後の泉門——加藤千蔭とその門下——村田春海と江戸派——篤胤と信友

の定位——平田派の学統から——香川景樹と桂園派——御杖と守部と雅澄の学

風

四	国学から国文学へ——古道論との決別……………	三〇
---	------------------------	----

〔第四期・転成期の国学〕

幕末の古典研究——明治初年の国学——明治初期の文化と学問——国学改良論と史的研究——方法論と資料の整備——近代国文学の先駆……………	三〇
--	----

第五章	近 代——国文学の胎生と文芸学への成長……………	三七
-----	--------------------------	----

時代の概観——明治三五年（一九〇二）以後……………	三七
---------------------------	----

明治大正の国文学——時局の転回と国文学——戦後の文芸学……………	三七
----------------------------------	----

〈付〉近代略年表……………	三九
---------------	----

一 初期国文学の形成——ドイツ文献学の導入……………	三九
----------------------------	----

留学前後の芳賀矢一——日本文献学の提唱——矢一と作太郎の意義——明治大正の概観とその特質——大正期の学者と業績と——津田史学と「文学序説」と……………	三九
---	----

二 昭和前期の国文学——諸学派の派生と消長……………	三九
----------------------------	----

時局の変転と国文学——歴史社会学派の擡頭——社会学的方法とその衰退——折口信夫と民俗学派——柳田民俗学との相違——岡崎文芸学の前提——文芸学の提唱と学派——文献学派と国学の体質……………	三九
---	----

三 戦後文芸学の展望——国際化と方法の模索……………	四二
----------------------------	----

戦後の国文芸学概観——歴史社会学の復活——理論と歴史の追究——基礎研究と比較文芸——思想史と文化史のあいだ……………	四二
--	----

終章 国文芸学の将来——研究史の達成……………四三

文芸史と文芸論の確立——内の整備と外への対応——学史と方法論の発見

あとがき……………四九

I 略年譜……………三三

II 研究業績目録……………三三

索引……………三九

日本文芸研究史

序 章 構想と課題——学史と方法論の探求

一 研究史と学史と——その必要性と可能性

日本文芸研究史とは何か？ その目的や意義、必要性と可能性・学史との関係などについて、まず最初に述べておかねばならぬ。

学史と研究史の意義

〈学史〉とは、学問の歴史であって、〈科学史〉のことである。物理・化学・生物学などの自然科学をはじめ、法学・経済学・政治学などの社会科学にも、古くから、それぞれの学史があった。哲学・倫理学・文芸学などの人文科学にも、当然学史があるべきだし、また實際殆どの学問には学史がある。

そしてこれらの学史は、その学問の成立から、対象と方法の理論・学者の伝記や業績・及びそれらの時代的変遷などについて記述するものである。更に学史には、現在の学問の水準と由来を知り、その将来への展望を予測する、という重要な意義がある。近代諸学の発展のために、学史の果たす役割は、きわめて大きいのである。

一方〈研究史〉の対象は広義の研究であり、厳密に学問的研究のみに限定しない。すなわち、ここで〈研究〉という場合、学問的・体系的に整備された研究よりも、もっと広い概念である。具体的にいえば〈国文芸学〉の場合、

体系的・学問的な研究ばかりでなく、その周辺や以前にある資料の蒐集や調査や、その読解や注釈までの総てを研究活動と考え、漠然と可成り広義に解釈して、これらの一切を含んで、〈国文芸研究史〉の対象と考えている。

こうして学史と研究史は、きわめて近い関係にあるが、無論同じではない。学問の方法と体系とが確立している場合、そこには当然学史が必要であり、その整備によって、はじめてこの学問が完成するのである。しかし研究史はそれ程厳密ではなく、やや漠然として、一般的・常識的な研究を含む歴史であり、それはしばしば、学史完成のための準備段階であり、その第一歩をなす基礎作業ともなるのである。

そして国文芸学の場合、〈学史〉はもとより、その〈研究史〉も、まだ殆ど未着手の状態である。

未完成の理由

前述のように、学史も研究史も、あらゆる学問に必要である。事実殆どの学問には、学史があるのに、国文芸学には、学史も研究史も未完成のままで、〈文芸学史〉のごときは、そういう名称の著書すら一冊もない。その理由は一体どこにあるのであろうか。

理由の第一は、国文芸学が、対象も方法論も、学問的な理論や体系が整備されていない点にある。いやあるいはそれは〈鶏と卵〉の関係で、何れが原因であり、何れが結果であるかはわからない。ただ言えることは、国文芸学の学的体系の未熟さと学史の未完とが、密接に関わっていることだけは確かである。そしてそれは、日本のみに限ったことではないが、その程度は、日本の場合、可成りきわ立っている。

第二の理由は、文芸学の対象である〈文芸〉そのものの本質にある。それは〈芸術の科学〉のもつ宿命でもある。言うまでもなく、芸術は個々の美を追究し、独自の美を創造する仕事である。文芸はその一分野で、コトバを媒材とする芸術である。コトバのもつ思想性や社会性もあるが、美そのものの主観的主情的な本質が、客観的・実証的・論理的な科学研究をきわめて困難にしていることである。十九世紀以来の西欧近代科学の様な方法論が、

これらの人文科学にまで、全面的に妥当するか否か。あるいは、西洋近代の自然科学的方法論が、唯一絶対のもので、日本を含む東洋の学問方法論を一律にカバーするか否かには、実は再検討を要する問題があらう。しかしともあれ、現在の科学的方法論は、文芸学の方法には、もっとも妥当しにくい不安定さを持っている。必然的に学問体系の確立が遅れ、学史や研究史への要求が、この学問において、切実さを持たなかったのである。

第三の理由は、従来の文芸学者の多くが文芸愛好者であり、科学者あるいは科学的なセンスと教養の持主が、殆どいなかった、という現実的な原因にもよるのである。すなわち、文芸学が科学であり、その対象の限定と方法論の確立が是非必要なことを意識し、そのために学史や研究史の必要性を痛切に自覚する学者が少なかったというところが、実は最大の理由であったかもしれない。現在の国文学には、理論や体系の書は殆どないし、そういう分野の専門家もない。第一現在に至るまで、普通「国文学」と呼ばれるこの学問の名称すら、古くは「古学・和学・国学」と呼ばれ、現在でも「日本文学・日本文芸学・芸文学・国文学」など、きわめて不安定である。「国文学史」や「日本文学史」という学名が、あるいは「文芸学史」の発達を遅らせた一つの原因になっている、とさえ考えられるのである。

〔注〕 国文学の学名と学史や方法論との関連などについては、昭和四九年一月刊『日本文学論究』三四号所収の拙稿「国文学名義考―和学から国文学へ」に詳論した。なおこれは後に昭和五八年刊の拙著『新国学論の展開』のⅠの一にも改題補稿の上収めてある。参照されたい。

ほかにもいくつかの理由はあろうが、何れにしても従来の文芸学者は、こういうおぼろげな意識をもちながら、又この学問においても学史や研究史の必要を感じながらも、それを抜本的に解決しようとする意欲も、具体的な努力も怠ってきた。すなわち、学史や研究史の可能性を考えたり、それへ挑戦する学者が、久しくこの学界には現れ

なかったのである。

研究史の現状と将来

前述のように、他の近代諸学には、学史も研究史もあるのに、われわれの学問には、それがなかった。例えばお隣りの国語学にも、国語史と国語学史があり、その専攻分野も確立し、専門の学者も著述もある。しかしわれわれの国文学には、〈国文学史〉（日本文学史）はあるが、これは国語史にあたる文芸史であって、文芸学史ではない。〈日本文芸学史〉（国文芸学史）という書名も、その内容をもった著書も、現在一冊も書かれていない。

〈研究史〉という書名の本は、現在までに数冊出ているが、名実共に備わった研究史は、まだ一冊もない、と言ってもよい。それも、〈何々研究史〉といった作品や作家ごとの部分的なものか、〈ジャンル研究史〉か〈時代研究史〉にあたるもので、日本文芸研究の通史は、今のところ見当らない。あっても、かなり古いもので、ここ五十年来の著書は皆無である。

実は私は、日本文芸学・日本文芸史の研究から、その学的体系を模索し、方法論を追求して学史の検討に進み、現在は、国学史や研究史の書き替えを、当面の主題としている。もちろん私は、その将来に〈日本文芸学史〉（国文芸学史）の完成を目ざしている一人である。しかし学史を書くためには、その学問の体系や方法を確立しなければならぬ。それは現在のところ、われわれの学問にとって、きわめて困難な課題である。いまの私は、それへの準備段階として、過去の国文芸の研究史を書いて、その実態を正確に把握しておきたい。

本書は、そのための基礎作業としての通史の試みである。

二 資料集成的研究史——従来の業績批判

前節に述べたように、従来の研究史に関する業績は、まことに貧弱である。しかし勿論それは全く無いわけではない。単行本が二冊と講座類に収めた啓蒙的な概説が数冊で、総てをあげても、ここに取り上げられるものは、わずか六冊に過ぎない。以下簡単にこれらを紹介しておこう。

まずはじめに、刊年順の書目をあげておく。

- (1) 国文学研究史 大五 野村八良
 - (2) 日本文学研究史 昭八 藤田徳太郎(改道講座 第一卷五)
 - (3) 研究史(国文学と文獻学) 昭三 久松潜一(東大出版会)
池田亀鑑(日本文学講座)
 - (4) 日本文学研究史 昭三 久松潜一
 - (5) 古典研究の歴史 昭三 風巻景次郎(岩波講座 一六卷)
 - (6) 研究史(歌学的方法とその伝統) 昭興 大久保正(三省堂講座 日本文学12)
- 以下順次解説して、簡単な批評を加えておこう。

『国文学研究史』

以上の書目で見えるように研究史の業績は、きわめて貧弱である。単行本は二冊しかなく、通史は一冊しかない。それも大正末年のもので、昭和に入ってから書かれた通史は一冊もないということになる。ともあれ、唯一の通史について、次に概説しておきたい。

著者の野村八良は、明治十四年（一八八二）生まれで、旧制中学卒業後、独学で中等教員資格試験に合格（明治三

八年・二四歳) 鹿兒島、東京で中学教員をしながら大正十年(四〇歳)更に高等教員試験に合格、直ちに旧制官立東京高等学校の教授となった。非常な努力家であり、独学の代表的国文学者であった。『鎌倉時代文学新論』(大一一・四〇歳)『近古時代説話文学論』(昭一〇・五五歳、学位論文)『室町時代小説論』(昭一三・五八歳)などの名著で知られるように、野村八良の専攻分野は、中世の小説であったが、また研究史・国学史に関する、先駆的な業績によって、彼の名は更に有名である。

大正十五年(一九二六)に、野村は四五歳で『国文学研究史』を刊行した。それは千頁を越える大著で、その後六〇年になろうとする今日まで、これを書き改めるものは一冊も出なかった。まず本書の目次を紹介すれば

第一章 総論

第二章 本論第一 契沖以前の国文学研究 小項目(一―四一) 省略

第三章 本論第二 契沖以後の国文学研究 小項目(一―三七) 省略

第四章 余論

(付録) 第一人名索引、第二書名及び件名索引

となる。これだけでも判るように、本書の組織は、契沖を境として、前後の二期に大きく分れている。その前期を〈伝統的前科学の時代〉とし、後期を〈科学的研究成立の時代〉としている。全体を列伝的に、各学者を中心にしておいて、その略歴・学風・業績・師承(学統)などを紹介し批判している。明治以後(近代)については除外されているが、日本文芸研究史の唯一の業績として、勿論他に比較するものはない。資料を忠実に網羅していて、今後の研究に大いに役立つ先駆的な秀れた業績として、高く評価されている。

しかしもちろん、本書にも、多くの欠点がある。いま主なものをあげると次の様である。その第一は、学者本位